



2025年から 住宅の設計に大きな法改正

今新築住宅を巡る法規制が大きく変わろうとしている。今後、住宅を新築、あるいは増改築される方は、大きな変化と工事金額の増加に頭を悩まされるでしょう。

その第一は、現在「説明の義務化」とされている、「省エネ基準」が全ての新築住宅・増築住宅に義務化され、現行の省エネ最高基準が2025年からは、最低基準とされます。

その背景は、2050年のカーボンニュートラル、2030年の温室効果ガス46%削減実現に向けて現行ZEH(太陽光パネルなどの設備と組み合わせることで光熱費ゼロを実現できるレベルの断熱性能を持つ住宅)水準の省エネ性能を全ての住宅に義務化するというものです。

今後は、「省エネ基準」の見直しで、「省エネ格差」が生まれます。

①光熱費が限りなくゼロに近づくことで、基準を満たさない住宅との光熱費格差が広がります。

②室内の温熱環境の改善により、ヒートショック等の事故が防げ、健康的な生活を享受できる。

③住宅ローンの金利が引き下げられ、税制優遇など金額面での格差が生まれます。

第二は、現在2階建て以下の木造住宅の構造基準が見直され、全ての住宅(200㎡以下の平屋は除く)に壁量計算あるいは許容応力度計算(ルート1)が義務付けられます。

今まで、建築士や審査機関の都合が優先されて特例が実施されてきましたが、今後は瑕疵トラブルを未然に防ぎ、どの設計者に頼んでも耐震性能の担保された住宅に住めるようになるため、施主側にとっては大きな安心につながります。

これらの法改正は、来るべき大地震から居住者を守るだけでなく、安心安全な住宅が法で守られ快適で、かつ温熱環境の整った快適住宅に住むことで健康寿命が延びる住宅になります。

4号特例廃止により 構造計算が義務化

	現行		→	改正	
	非住宅	住宅		非住宅	住宅
大規模 2,000㎡以上	適合義務 2017.4~	届出義務		適合義務 2017.4~	適合義務
中規模	適合義務 2021.4~	届出義務		適合義務 2021.4~	適合義務
300㎡未満 小規模	説明義務	説明義務		適合義務	適合義務

新築住宅に 省エネ基準を義務付け

2025年~ 適合義務化 ▲ 建築不可 ▼	等級7	HEAT20 G3 相当	2022年10月~
	等級6	HEAT20 G2 相当	
	等級5	ZEH基準 相当	
	等級4	平成28(2016)年省エネルギー基準	2022年3月まで
	等級3	平成4(1992)年省エネルギー基準	
	等級2	昭和55(1980)年省エネルギー基準	
等級1	無断熱(等級2に満たないもの)		

第9回 建築ネット・文化美術展 (11/10~13)

24人が80点を出品 前回よりにぎわい見せる
大物新人登場 色鉛筆画でスカイツリーを表現



恒例の第9回建築ネット文化・美術展が11月10~13日、新宿区民ギャラリーAホールで行われ、24人が80点の個性的な作品を出展し、来場者を楽しませてくれました。隔年開催の同展。2回連続でコロナ禍の開催でしたが、感染防止対策を強化し、参加者・来場者の協力を得て無事開催することが出来ました。

毎回、さまざまなカテゴリーの作品が並び、会場は楽しい雰囲気になります。今回は隣接するBホールで染色展が行われていて、同展の関係者が行き帰りに立ち寄ってくれるケースが多く、前回より賑わいをみせました。

“新人”で注目されたのが一級建築士の小玉隆司さん。色鉛筆を使ったスカイツリー6景が色鉛筆には見えない細密な色使い、繊細なグラデーション



が高く評価されました。小玉さんは初参加ですが、スカイツリー6景の中には3年がかりの作品もあるそうです。

翌年のカレンダーの絵柄を選ぶのも文化・美術展の楽しみですが、2023年上期カレンダーの絵柄は満場一致で6景の一つ、浅草新仲見世からみたスカイツリーの作品が選ばれました。会員のみならずのお手元に届いたでしょうか。

下期カレンダーの絵柄候補も多彩です。夕日を背景に農地と立ち並ぶ樹木を描いたカラーの版画「育む」、椅子に座った金髪女性が読書の手を休めぼんやりと外を眺める「望郷のウクライナ」他、以前にも増して素晴らしい作品が多かったのが特徴です。

次回は2024年の11月開催。コロナが終息した秋空の下で、みなさまと元気にお会いしましょう。

「ラーゲリより愛を込めて」 最後まで仲間を励まし家族を愛した 山本幡男氏の短い生涯

建築ネットワークセンター顧問の建築家、山本厚生さん(神奈川県秦野市)の父親・幡男氏を主人公とした邦画の話題作、「ラーゲリより愛を込めて」を封切初日の12月9日、都内の映画館に観にいきました。久しぶりに映画を見て泣きました。

ソ連軍の捕虜となり、過酷な状況の中で「帰国できる日は必ず来る」と仲間を励まし続け、本人は帰国が叶わなかった幡男氏(二宮和也)の実話です。

原作は辺見じゅんの「収容所(ラーゲリ)から来た遺書」。妻モジミさん(北川景子)は子供4人を育てながら夫の帰りを待ち続けますが、幡男氏の帰国はかなわず喉頭がんで亡くなりました。享年45歳。幡男氏が残した遺書は、収容所から文書を持ち出せなかったため7人が分担して暗記し、帰国が実現した後、それぞれが山本家に届けました。

厚生さんの妻ヒカルさんは、モジミさんからこの話を聞いて「これは昭和の歴史の一つ」と思い、当

時、辺見が募集し編集していた「昭和の遺書」に応募したのです。これが「収容所からきた遺書」(1989年、大宅賞と講談社ノンフィクション賞受賞)として発刊され、さらに30余年の時を経て映画化されました。

厚生さんは次男。高校生の時に父の死を知らされました。「子供等へ」の遺書に「全国民が幸せになることを片時も忘れてはならない」とあるのを読んで、「これから何をすべきかを考えた」そうです。

全編にわたり愛の美しさ、命の尊さ、人間の生きる意味を問い続けている映画。男女、年齢を問わず多くの人に観てもらいたい映画です。

